# 太宰治「駈込み訴へ」の「仕掛け」と作品構造

石　橋　邦　俊

美知子夫人が伝える「駈込み訴へ」成立時のエピソードをここで繰り返すには及ぶまい[1)]。時おり盃を口に運びながら、一瞬の停滞もなく口述されていったというその様は、感情の大きな振幅と心理の微細な陰影を滑らかな言葉に写しとった、この作品にふさわしい。読者は、眼で文字を追いつつも、自らのうちに反響する言葉の響きとリズムに先導され、自覚する間もなく「語り手」の息に自らの息を合わせ、作品の結尾に辿り着くだろう。言うまでもなく、太宰治一流の、ひとり語りの妙技である。

しかし、一気に文字にされたこの作品に、太宰治は、いくつかの巧妙な仕掛けを仕組んでいるように筆者には思える。

筑摩書房版「太宰治全集」第四巻で18ページ（228～245ページ）を占める「駈込み訴へ」は、三つの形式段落から成っている。

わずか２行の第一段落では、「旦那さま」の前で何者かが語りかけている。

続く第二段落は194行（３～196行）を占める。「私」のひとり語りで綴られる、この長大な段落は、８つに区切ることができるだろう。

a:3～18行　b:19～32行（「…勤めて來たのだ。」）　c:32（「私はかう見えても、…」）～75行（「それだけだ。」）　d:75（「私は、なんの報酬も…」）～85行（「お聞き下さい。」）　e:85（「六日まへの…」）～102行（「…赤くなつてゐました。」）　f:102（「私は、あの人の言葉を信じません。」）～136行（「死んだつて惜しくはない。」）　g:136（「さう思つたら私は、…」）～141行（「落ちついて申し上げま

す。」）　h:141（「そのあくる日、…」）～196行

先行する第一段落を受けた後、a で描かれているのは、「私」と「あの人」の関係である。「あの人」の世話をしてやっている「私」は、その献身にも拘らず、「阿呆なくらゐに自惚れ屋」（13行）の「あの人」から嘲弄されている。

a では、「私」と「あの人」が、二月違いの同年齢であるという設定を押さえておきたい。このモチーフは、117～118行と288行（第三段落）でも繰り返される。更に、126行「あの人が若いなら、私だつて若い。」も加えて良いだろう。

b では、「あの人」と「あの無能でとんまの弟子たち」（19行）からなる集団の中での、「私」の位置が提示される。「私」の役回りは、いわば実生活の面での遣い走りである。

b において読者は、直接引用されている「あの人」の言葉（20～21行）や「痴の集り」（22行）である弟子たちの名前などによって、「あの人」が、イエスであると知らされる。

c では、「私」がイエスと打ち解けた対話を持った、一度限りの場面が回想される。ここで強調されるのは、「よつぽど高い趣味家」（33行）である「私」から見た、イエスの「美しさ」である。「私はあの人を、美しい人だと思つてゐる。」と口にした（33～34行）直後に、「私」は「あの人は美しい人なのだ。」（36行）と確認し断言せずにはいられない。c を締めくくるのも、イエスの美しさを更に讃え、己れのイエスへの愛を告白する３文（74～75行）である。

イエスへの愛の激しさを端的に読者に伝えるのは、「私」の死の決意（「あなたが此の世にゐなくなつたら、私もすぐに死にます。」54～55行）だろう。回想の中のこの言葉は、「旦那さま」を前にした現在において再確認されるため、66行「あの人が死ねば、私も一緒に死ぬのだ。」では、先行する「私はあの人を愛してゐる。」の１文とともに、幾分強められる。c では、33行で提示され、

74～75行で閉じられる、イエスの美しさへの讃仰を枠に、「イエスの死＝私の死」というモチーフが過去から現在へ増幅して読者へ伝えられると言って良いだろう。

dでは、aからcまでの内容が、簡略化されて再現される。「右大臣、左大臣」（76行）を含む75～77行では、イエスの弟子集団での「私」の位置が再提示され、浜辺でのイエスとの対話を背景とする77～82行では、イエスへ寄せる「私」の「無報酬の、純粋の愛情」（81行）が確認・強調され、「旦那さま」に訴えかける82～85行で、読者は第二段落冒頭へ引き戻される。「私」の語りは、一旦、ゼロ地点に立ち返るのである。それ故、a～cを、第二段落の長大な「序」とみなしても良いだろう。続くe以降、「私」の語りは、福音書に描かれたいくつかの場面の再話と、「私」からの注釈という形式で進められるようになる。

「再話」と「注釈」は、文の長短において概ね区別されている。ともに「私」の言葉の間接的な再現ながら、「ナルドの香油」[2)]の場を描くeの91～95行と、浜辺でイエスに語りかける、cの47～61行を比べれば、句点を多用し短文を積み重ねる後者から「私」の感情の高ぶりが伝わってくる。前者を「叙事の文」、そして後者を「叙情の文」と呼んでも良いだろう。

eは、「叙事の文」で描かれた「ナルドの香油」の場（ヨハネによる福音書、12：３～８）である。

続くfは、マリヤとマルタを比較する119～123行という「叙事の文」と、129～130行の「旦那さま」への語りかけを別とすれば、畳みかけるほどの短文を連ねた「叙情の文」で埋められている。

fの中心をなすのは、「私」のイエス像の変化である。最早「美しい人」ではなくなった、「私」の中のイエスへの端的な非難が、二度、現れる「ヤキがまはつた。」「だらしが無え。」（「だらしない。」）（116、135行）だろう。「あんな無知な百姓女ふぜい」（108行）マリヤにイエスが示した（と思い込まれている）

感情は、「私」にとって「なんといふ失態」であり「取かへしの出來ぬ大醜聞。」（109行）なのだが、イエスへの断罪は、ここでも同年齢という意識（116～118、126行）に裏打ちされている。殊に117～118行「しかも、あの人より二月おそく生まれてゐるのだ。」の「しかも」は、6～7行「私は、あの人よりたつた二月おそく生まれただけなのです。たいした違ひが無い筈だ。」という、自らを（二月年上の）イエスと同じ位置に引き上げようとする方向とは逆の、むしろ（二月下の）己れを優先させようという意識を示している（「それでも私は堪へてゐる。」118行）。「師」であり「主」であるイエス（5行）に及ばない「若さ」が、同時に、マリヤへの思慕においてはイエス以上に当然とみなされる「若さ」でもある（しかも、「私」は「堪へ」、イエスは「醜態の極」（114行）を示した）という点で両者が相殺されてしまったかのように、118行以降、「二月の差」には言及されない。

福音書にもとづく「ナルドの香油」（e）と「都入り」（h）をつなぐ、6行にも満たないgは、「駈込み訴へ」のストーリー上の転換点をなしている。「美しい人」イエスが死ねば、「私も一緒に死ぬのだ。」（66行）と公言していた「私」が、「あの人を殺して私も死ぬ。」（140行）と決意するのである。（ただし、イエス殺害と自裁がペアとなって再度、提示されるのは、第三段落の253行である。都入りから終末予言（「マタイ伝福音書」[3] 24：7～25：30からの抜粋）までを描くhでは、イエス殺害の意識のみが増幅されていく。）

「叙情の文」の積み重ねの中から、「私」のイエス殺害の思いを芽生えさせ（137～138行）、一文ごとに自己確認し（138行）、イエスの意図を推し測らせ（138～139行）、決意させた（139～140行）後に、太宰治は読者を今一度、「旦那さま」の前に引き出してくる。141行以降の「叙事の文」へ移行する直前の「はい、はい。落ちついて申し上げます。」は、第二段落冒頭のままの一句である。「私」の以後の意識と行動を支配するイエス殺害の決意を提示し強調した直

後に読者を段落冒頭へ引き戻す、この書き方は、正反対の指向の衝突から生じる、ある種の「きしみ」を通して、「私」の心理の「歪み」を読むものに実感させる、みごとな仕掛けである。

第二段落を締めくくる長大なｈは、福音書に依拠した「叙事」の部分に「私」の「叙情」の部分をさし挟む形で進行する。

第一の「叙事」部（141～146行）に続く「叙情」部においては、驢馬にうち乗るイエスの姿を憐れみ、「私」は、「殺してあげねばならぬ」という「つらい決心を固める」（153行）が、第二の「叙事」部（「宮清め」）後に「私」の語りを通して描かれるのは、「自重自愛を忘れ」（177行）、「あまりボロの出ぬうちに（中略）この世からおさらばしたくなつて來た」（178～179行）イエスである。ｇ（139～140行）に現れた「イエス殺害の決意」と「自分を殺させるやうに仕向けているイエス」という、一対を作っている思考が、ｈ前半（141～184行）の「叙事」部に投映されているわけだ。ただし、第一の「叙情」部に比して（「花は、しぼまぬうちこそ、花である。美しい間に、剪らなければならぬ。」151～152行）、第二の「叙情」部にあって、イエスは最早、「美しい人」ではなく、「私」の愛情の対象でもなくなっている。

直接引用される「狂つた」（191行）イエスのパリサイ人非難[4)]（「マタイ伝福音書」23：25～37）と、間接引用される「身のほど知らぬ」（195行）終末予言を受けて、「薄汚くさへ」思える（183行）イエスを「私」は断罪する、「必ず十字架。それにきまつた。」（195～196行）

第二段落は、この断罪で閉じられる。「ナルドの香油」の場直前の82～85行、そして「都入り」直前の141行の、「旦那さま」への呼びかけによって二度、段落冒頭へ引き戻される物語の流れは、ｇの「殺害の決意」を、それまでの「美しい人」イエスへの愛情に代わる新たな撥条として、一気に（「引き戻し」なしに）断罪へなだれ込む。194行を要する第二段落は、巧妙かつ綿密に構成され

ているのである。

197～301行までの第三段落は、４つに大別できるだろう。

i：197～207行（「…決意しました。」）　j：207（「私は、ひそかに…」）～269行（「…押し當てました。」）　k：269（「私も、もうすでに…」）～280行（「…捕へることが出來ます。」）　l：280（「ああ、／小鳥が…」）～301行

197行で改めて語り始める「私」は、iにおいて、「宮清め」の場で失われたかに見えたイエスへの愛をくり返し強調している。イエスの居所を密告するのは、「私の義務」（202行）であり、「この私のひたむきな愛の行爲」（203行）である。

jでは「最後の晩餐」の場が３つの「叙事」の部と、さし挟まれる２つの「叙情」の部から構成されている。

３つの「叙事」の部は、直接引用の形をとるイエスの言葉を「私」の語りの文の中に埋め込めば、それぞれ、207～214行が５文、229～244行が５文（ただし、「」で区切られていないペテロの言葉を地の文とみなせば７文）、そして、254～269行が１文（もしくは、262行で切れば、２文）で作られている。[5)]

さし挟まれる２つの「叙情」の部では、短文が積み重ねられている。

第一の「叙情」部（214「あの人…」～229行「天國を見たのかも知れない。」）では「光るばかり」（220行）に美しいイエスへ寄せる「私」の思いが綴られている。その讃美は、第二段落cの調子を遥かに超えて高揚するが、その激しさに応じて、第二の「叙情」部（244「はツと思つた。」～254行（「復讐の鬼になりました。」）で「私」が陥る影も深い。253行では、イエスを殺害し自分も死ぬという、第二段落の転換点、gで提示された決意が、再度、確認される。続くkの273行で「私」は改めて「旦那さま」に語りかけている。しかし、276～

277行「もう、もう私は我慢ならない。あれは、いやな奴です。ひどい人だ。」は、第一段落の「あの人は、酷い。酷い。はい。厭な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。」を逆順に、わづかに短縮した再現である。この後すぐに(278～280行)、「私」は「あの人の居所」(４行）を密告するのだが、読者は、k によって、ここまでの物語を遡り、第一段落の冒頭に立ち帰らされるのである。この対応は同時に、具体的な内容が不明な、激昂した訴えかけによって擲げ出された軌跡が、270余行を超えて到達した着地点でもある。

280行（「ああ、…」）以降の、「駈込み訴へ」の終結部で最初に提示されるのは、「夜に囀る小鳥」(282行）の声である。おそらく「私」にしか聞こえていない、このうるさいほどの囀りは、「私」の錯乱を暗示しているのだろう。「ピイチク」という、いかにも工夫のない擬音が、「私」という人間の卑俗さを露呈している。大祭司のもとへ急ぎながらも、啼き声の主を確かめようと夜の森の暗がりで首をかしげ耳を澄ます姿は、既に異様とも言えよう。

自分の死を自覚しているかに見えながらも（「今夜は私にとつても最後の夜だ。」285行)、「旦那さま」に向かって「私」が訴えるのは、６行で示され、その後、２度繰り返された（117、126行）「同年齢」という主張である。このこだわりも、自ら「よつぽど高い趣味家」(33行）と名のっていた「私」の、卑小な実体を示しているのかも知れない。

「私」のイエスへの裏切りを支えてきたのは、第三段落201～206行でも確認されていたように、「美しい人」への「ひたむきの愛」(203行)、「純粋の愛」(204行）である。裏切りは、誰よりもイエスを愛する「私」に課せられた「義務」(202行）でもある。イエスへの愛があるからこそ、イエスの死の対として自らの死も語られてきた（54～55、66、139～140行)。しかし、「旦那さま」が差し出す「三十銀」(290行）を前に「私」は、自分の行為の（或いは「自分の存在の」）最後の拠り所を、自ら否定せざるを得ない。小鳥の声が暗示していた

錯乱の中でも何とか保たれてきた「私」の人格は、その支えを自ら棄て去ることで完全に崩壊してしまう。

「申し上げます。」と語られ始めた「駈込み訴へ」は、「申しおくれました。」(300行）に続くユダの名告りで閉じられる。

三段落からなる「駈込み訴へ」に太宰治が仕組んだ「仕掛け」は、筆者から見て、以下の三つである。

①同一、もしくは類似した言葉（句、文）の対応。

②「イエスの死＝ユダ自身の死」というモチーフとその変容。

③「イエスとユダが同年齢」というモチーフ。

この三つのいずれもが、作品の構造にかかわっていると筆者には思える。

わずか２行の第一段落と第三段落276～277行の対応は、イエスをめぐるユダの回想を挟みこむ、作品全体の大きな支柱をなしている。

しかし、同じ対応でも、第二段落のそれは、読者を（或いは、物語の進行を）段落冒頭へ「引きもどす」役割を担っていると思える。物語の前進する方向性に時折り加えられる逆進性が生み出す「きしみ」は、ユダのイエス殺害の決意（139～140行）の直後に取り除かれ、ユダの語りは第二段落結尾の断罪へなだれ込むが、その結論がイエスの磔刑であっても、最早わずかな滞留もなく、ユダの激情の高まりのままに増幅されていく語りの流れは、読者には、むしろ爽快とも感じられるだろう。

この第二段落の結節点にあるのが、既に述べたように、「イエスの死＝ユダの死」というモチーフの転換である。「美しい人」への思慕を実質としていた、このモチーフは、ここで、愛憎と嫉妬が入り混じった「イエスの殺害＝ユダの自裁」へ変貌する。この136～140行が、「駈込み訴へ」全301行の、ほぼ中央に置

かれていると言えば、あまりに恣意的だろうか…。

「イエスの死＝ユダの死」の内実が作中で大きく変化を蒙る一方で、一貫して主張されているのが、二人の「同年齢」である。聖書学やキリスト教の伝承にもとづくとは（筆者には）思えない、この設定を、ユダの語りの中で、太宰治が執拗に繰り返させた意図は、筆者には不明である。既述のように、「よつぽど高い趣味家」(33行）を自認するユダの卑俗さを、作中一貫して暗に示そうとしたのだろうか。いずれにせよ、第二段落開始直後の６行に初めて示され、ユダが三十銀を受け取る直前の285～288行に拡大された形で最後に現れるこのモチーフが、機能において、全編の統一性を高めていることは、間違いないだろう。

＊註

1） 津島美知子著『回想の太宰治』（講談社文芸文庫、2008年）42～43頁。

2） 福音書に描かれる、イエスの生涯のエピソード名については、塚本虎二訳『福音書』（岩波文庫、1963年）所収の「各書の標題」（363～376頁）に依った。

3） 本論文において大正改訳を参照する場合、「マタイ伝福音書」のように、福音書名を「」に収めている。参照テキストは、2014年に出版された岩波文庫『文語訳新約聖書』である。

4） 志村有弘、渡部芳紀編『太宰治大辞典』（勉誠出版、2005年）によれば、太宰治が読んでいた聖書は、大正改訳であるという（204頁)。文語体による翻訳である。主として口語体でイエスの言葉が綴られている「駈込み訴へ」の中で、「宮清め」に続く184～190行は、大正改訳の「マタイ伝福音書」23：25～33及び37に、省略とわずかな変更を施した、直接引用である。律法学者とパリサイ人を非難し、エルサレムを嘆く、文語体のこのイエスの言葉を、長部日出雄は、その著『桜桃とキリスト』（文春文庫、2005年）で、「まことに卑小で卑俗で現代的なユダの口語の語りを前後に置くことによって、イエスの文語の言は、ますます目も眩むほどに輝かしい光彩を発することになったのだ。」（229頁）と高く評価している。しかし、短くはあるが、作中、文語体で引用されているイエスの言葉（20～21行、71～72行）がいずれも「私」から批判的に解されているのを考えれば、６行余りの文語体による、このイエスの言葉は、神の子の権威ある言葉ではなく、「自重自愛を忘れてしまつた」（177行）凡夫の、「私」から見た「無禮傲慢の暴言」（182行）と理解するべきだろう。太宰治が口語体で語らせたイエスの言葉は、どれも、静かな呼吸を保ちつつ、かすかな憂いを含んだ「美しい人」の言葉である。海老澤有道著『日本の聖書』（講談社学術文

庫、1989年）によれば、大正改訳も含め、キリシタン時代以来、日本語の聖書翻訳は、わずかな例外を除けば、文語体を採用してきたという。翻訳ではないにしても、太宰治が日本語で表現したイエスの言葉を、口語体による優れた再現の試みとして見ることもできると筆者は考える。

5） 因みに、第三の「叙事」の部でイエスが裏切り者を言い当てる言葉の中の一文、「その人は、ずゐぶん不仕合せな男なのです。」（267行）は、太宰治の創作だろうか。続く「ほんたうに、その人は、生まれて來なかつたはうが、よかつた。」（267～268行）は、通常であれば、自らを売り渡す者へのイエスの非難と解されるだろう。しかし、太宰治が加えた一句の後では、裏切る者の苦しみへの同情とも受け取れる。いずれも弟子への洗足（ヨハネによる福音書、13：12～20）を含まない「マタイ伝福音書」26：21（『文語訳新約聖書』岩波文庫、2014年、71頁）、「マルコ伝福音書」14：21（同前、118頁）の「その人は生まれざりし方よかりしものを」に先行するのは、「然れども人の子を売るものは禍害なるかな、」である。田中良彦著『太宰治と「聖書知識」』（朝文社、2004年）97頁に、「駈込み訴へ」の該当箇所と並列されている、塚本虎二の口語訳（昭和11年２月、「聖書知識」74号）でも、「しかし、禍なる哉、人の子を渡すその人！」である。（ただし、岩波文庫『福音書』57頁と155頁で塚本は、「だが人の子を売るその人は、ああかわいそうだ！」と訳している。）